

季節のおまつり

伊雑宮御田植祭

伊勢神宮では昨年二十年に一度の御遷宮が行われた。その別宮である伊雑宮は、志摩市磯部上之郷の静寂な杜の中にひっそりと祀られており、誠に簡素で古代の社を彷彿させる。奈良正倉院に伝わる書物に、伊勢神宮に米穀など作物を献納する地として磯部七郷が記されており、毎年当番で、御料田とよばれる神田に於いて御田植祭が古式に則って行われる。

磯部は伊勢の神領民であり、毎年六月二十四日、伊雑宮で朝から式典、やくびとの拝礼にはじまり、神官より作長に早苗が授けられ、それを持って御料田へ参進する。神官が御料田をお祓いしたあと、作長は左、右、中と早苗を奉下してゆく。十代の早乙女と二十代の田道人（立人）達は苗場を三周半回って早苗を受け取る。引き続き「竹取り神事」という神田の中央に設置された青竹の先端に「太一」と書かれた団



扇といふ忌竹を近郷漁村の男達が泥んこになって奪い合う。この竹の一片を船に祀れば豊漁になるという言い伝えがある。かつて牛によつて代搔きがなされたように男達によつて田が搔き回されたところで、「御田植神事」がはじまる。御料田の正面入口に注連縄を張つた大鳥居が据えられているのは珍しく、雅で清々しい早乙女の姿と共に、日本人が稻作を尊び、この御田植祭が神聖であることを示している。

鳥帽子、装束に身を正した囃し方十数名は、神田の後方から裸足で田に入り、お互いに向き合つて並ぶ。謡曲の一部分「小謡」を謡い、笛や鼓で奏樂する中、白装束に真紅のたすきをかけた早乙女と田道人（立人）たちが交わり並び田植えを行つてゆく。このあと、稚児を乗せた田船が田に入り太鼓を打ち、少年がササラをもつて鳥刺しの舞の田楽を踊る。

この古式で荘厳な田植え祭は時代絵巻を見るようである。千葉の香取神宮の御田植祭と大阪住吉大社の御田植神事と共に日本三大田植え祭の一つに数えられており、磯部に初夏の到来を告げる。

(写真・文 宮本卯之助)



いなせな鳶頭衆

三社祭

今年の三社祭は好天に恵まれ、最終日には一之宮、二之宮、三之宮の三基の本社神輿の渡御が行われた。早朝の宮出しから始まって、神輿は浅草神社から西・南・東の各方面に分かれて、終日氏子四十四カ町を練り歩き、宵闇の境内に戻ってきた。

担ぎ手と境内を埋めつくした見物衆の威勢のよい三本締めで、祭の幕はいつたん閉じられたが、興奮冷めやらぬ若者たちはもう一度神輿を担ぎ挙げた。社殿正面から神輿倉まで、再び境内を右に左に担ぎ回り、名残を惜しむように最後の力を振りしぶつ



湯島天満宮例大祭

五月二十五日、湯島天満宮様の例大祭が執り行われました。無事渡御された本社神輿は、弊社で約1年かけ総修理させていただいたお神輿です。明治期頃の製作といわれるこちらのお神輿は、神紋である加賀梅鉢が細部にまで施されるなど、こだわりが多くの大変立派なもの。

晴天の五月十二日にお納めし、お祓いを受け、二十五ある氏子町会にお披露目されました。きれいになつたお神輿が戻ってきましたと各町会の皆さんも笑顔で喜んでいただいている姿、また例大祭で賑わう湯島の町の様子を拝見し、職人一同大変嬉しい気持ちになりました。

祭とともに

神輿担ぎに酔いしれた若者たち、その場に参加した人々は、来年またこの三社祭に来ようとも心に決めて家路につく。

私の若い頃には、社殿に戻った神輿は氏子の若衆の手を離れ、鳶頭（祭頭）だけで「倉入れ」というものが行われていた。

祭頭たちの手に渡つた神輿は、社殿に向かつて一旦高く捧げられると、すぐさま鳥居の内側まで数十メートル、バックで一直線に下がり、再び社殿に向かつて整然と進む。神楽殿の江戸祭囃子が最高潮に達するなか、町の若い衆にお手本を見せるようすに、担ぎ進むさまは実に見事なものであつた。

今は神輿の棒の上に誰も乗ることはできないが、その時だけは祭頭が前に一人乗つて指揮した。名人といわれる頭もいて、それも祭の魅力の一つであった。現在そのような担ぎ振りが見られないのは誠に残念である。

(写真・文) 宮本卯之助

今お住まいの地域にもきっとお祭りがあります。ちよつと勇気を出して参加してみて下さい。今までとは違う町の景色と新しい魅力があなたを待っているかも知れません。

一
二
三
四
五
六
七
八
九
十

五月の東京下町は祭に染まる。人々が活気づき、町全体がそわそわしてくるのがわかる。今では全国的な観光イベントでもある三社祭ですが、昔も今もこの祭を支えるのは普通の浅草の人々です。



株式会社 宮本卯之助商店
企画広報室
〒111-10035
東京都台東区西浅草1-1-1
電話 ○三一三八四四一二一四一
www.miyamoto-unosuke.co.jp